



アラン

ーノルマンディー

人のプロポ

【2013年 7月号】

翻訳：高村 昌
高 憲

- 百二十一 ソルボンヌ大学生
- 百二十二 不況
- 百二十三 シャーロック・ホームズ
- 百二十四 自由意志
- 百二十五 四月には薄着をするな...
- 百二十六 宗教的体験
- 百二十七 偉大な副王は腹を出して...
- 百二十八 ドレフュス事件とそれらの主張
- 百二十九 私たちは未開人のように議論する
- 百三十 司法調査と歴史
- 百三十一 速度
- 百三十二 哀れなもの（小魚）
- 百三十三 文学の召使い
- 百三十四 謙遜と思い上がり
- 百三十五 恐怖と夜
- 百三十六 人生はメカニズムである
- 百三十七 彫像には音楽家がいる！
- 百三十八 精神の自由は稀有
- 百三十九 学士号を取る術
- 百四十 戦争の情熱
- 百四十一 近代主義
- 百四十二 ジャンヌ・ダルクの罪
- 百四十三 必要性には人間の顔がある
- 百四十四 自然の中の美
- 百四十五 歴史家の愚行（谷間の百合）
- 百四十六 或る祈りへの神の答え
- 百四十七 恥辱の無益さ
- 百四十八 平板な絵葉書
- 百四十九 余りに早熟な賢者たち
- 百五十 恩知らずの奨学生

百二十一 ソルボンヌ大学生 (L'ÉTUDIANT EN SORBONNE)

先日、ソルボンヌ大学生が私に苦勞話をしました。彼は私に言いました、「七十四人の歴史の教授たちはそれまでの過去の時代の記録を壊して新しい記録を作る方法が重要である、とあなた良く言っています。しかし、あなたは歴史家たちという大集団のことを忘れています。彼らはフランス語、ラテン語、ギリシア語、ドイツ語、英語あるいはイタリア語を教える口実の下に今まで歴史を作り、作者たちの詳細な人生を語り、ラシーヌの洗礼場面の台詞を重々しく読み、あるいはゲーテが創った両親の結婚場面を読んで、彼ら作者たちの作品は除いて、作者の全てを一言で認識しています。歴史という害虫は、思想の崇高な制度まで囓ります。昔は人が語る時、青春を説明するためにプラトンやデカルトやスピノザの理念を語る人間がおりました。今は最早、説明されることはありません。同一作品の出版者の違いを比較して満足したり、蝶のコレクションを見せるように色々な出版社のものを見せてくれます。彼らが文学に手を染めるや否や、精神のことが全然思考されていないと皆から言われます。かくして彼らは勉強して、出版社や序文や注解を綿密に調べます。カードを作り、そして私たちに書き取らせませす。私たちの精神を形作るために、彼らは私たちにカードを作らせ、私たちも又作ります。今、私はカントの哲学を論じている全てのフランス語の本の表題と出版日を研究することになっています。図書館司書の仕事です。そして、もしも私たちのうちの誰かが、時に何らかの強力な原則を説明しようとするれば、最悪の意味がなくもないことを彼らは講壇の高い場所から言うのです。〈それ故に、現代の精神の習慣や観念と共に、二世紀も昔の形態を理解しようとしてはいけない。理念は歴史的事実を生む。何も削らず、何も加えないで、その儘で理解しなければならない〉。以上は、私たちに配られた知性のパンであり、私の理解力は小さな紙で一杯です。私は登録されたアカデミー会員の如く、二十歳の老人なのです。現在知られているあらゆる言語の音綴辞典を私は創るつもりでいます。私のことをあなたは同情して下さい。ほんの僅かな知性を保存するために私はどうすれば良いのか、私に言って下さい」と、その学生はつけ加えて言いました。

私は彼に冷たく答えました、「それは大変簡単です。そこの歴史家たち全員に非難の声を上げなさい。大声で考えを言いなさい。あるいは最善なのは、彼らがあなたを排除することで、あなたは会計係とかセールスマンになることです。あなたは直接見て、物事や人間を知るでしょう。あなたは物を売ります。物を買います。あなたは夢中になります。あなたはエジプトのファラオの歴史をたどたどしく読む代わりに、今日の歴史を生きます。他のことに関しては時折、私を見に来るでしょうし、私は序文も伝記も注も解説も無い美しい本をあなたに貸すでしょう。かくして生きているものと永遠なるものとの間で、あなたは人間として立派な人生を送るでしょう」。

百二十二 不況 (CRISES ÉCONOMIQUES)

だんだんと商人たちは不平を言います。仕事が最早手詰まりのようです。私たちは景気の波頭にいました。これからはどん底へ再び落ち込んで行きます。人間社会は海のようなもので、決して平衡を保っていることがなく、只通過するだけで遠ざかって行き、速度を増しながら戻り、追いついて、再び戻って来ますが、何時もそんな風で振り子のようです。

少なくとも振り子は大変に単純な器具です。私は糸に重りを付けます。その重りを右の方へ持って行き、そして動かします。その重りは平衡点に達するとだんだんと速くなって弧を描いて落下し、中心点になると最早落下せずに軌道に乗って反対側に再び上昇して、推進力が少しずつ使われて停止し、そして再び落下します。それらの動きの中に、大富豪と極貧の間を絶えず揺れ動きながら、私たちが何時も目標を乗り越えさせる社会的力を把握しなければなりません。

これらの力の動きが、大変にはっきりしている場合が幾つもあります。自動車が良く売れます。皆がそれを注文します。予約がされます。現金を支払います。車を手に入れるためには、二か月も前に予約金さえ支払います。この気が狂ったような注文は生産を動かします。資本が提供されて利益が生み出されます。工場が建ちます。工作機械が唸り声を上げます。誰もが急ぎ、前年の注文に釘付けになります。従って、注文は最早増えなくなって、生産が落ちます。注文が再び増える時は、既に生産が減っています。皆に供給されるまさにその時に掛けで売り始めますし、あるいは割引が大きくなって生産すれば損失が出るようになります。その時は値引き販売から競り売りに変わります。利益は小さくなります。資本金や余った財産は別の物に使われるようになり、生産者は沢山の機械を持つようになり、現金が足りません。今は、景気の波の谷にいます。

しかし、そこは小さな波でしかなく、潮がやって来ると、大波の背中の上で踊る人が見えるような時があります。如何に世界全体の事柄が同じ種類の法則に従っているのかを理解しなければなりません。景気が上昇している時期がありますが、その時は物の値段が全て上がります。それは自明のことです。沢山稼ぐ人は、沢山の物を買います。その上、値上がりは購買力を落とします。というのも人々は自問するからです。明日はもっと高くなるだろう。結局、高くなった物ばかりを買ってお金を支払う労働者は、もっと高い賃金を要求し、そのことは原価を高くします。値上がりは値上がりを生みます。皆が沢山お金を稼いで、沢山のお金を使います。皆が満足して、波は上昇します。お金が不足するようになる時が来ます。そして、手形を軽率に切って破局を迎えます。けちであることと、慎重であることが、そこで叫ばれます。一人ひとりが財産を取り戻します。購買は少なくなります。売って稼ぐのも少なくなります。お金は一方に詰め込まれ、他方に利益が生じます。値下げは購買力を妨げます。何故なら誰もが自問して迷っているからです。待ちましよう、明日も未だ高くないでしよう。値下げは値下げを生みます。皆の

稼ぎが少なくなり、お金を使うのも少しです。皆が不満です。ギリシア神話のカッサンドラは戦争を予言します。そして、セレブロフは〈現代意識の不安〉についての本を書きました。

(一九〇八年六月三日)

百二十三 シャーロック・ホームズ (SHERLOCK HOLMES)

シャーロック・ホームズ (1) は、新聞記者たちがメモを取っている間に、犯罪が起こった部屋 (2) を大股に歩いて測定して写真を撮りました。それが終わると彼はぞんざいに言いました、「我々は犯人を捕まえるが、二十四時間は発表しないでくれたまえ」。全員が走り去りましたが、それ以上は発表を遅らせないためでした。

その時、私はシャーロック・ホームズに言います、「鉛の弾丸は水深が分かっている池の中を決められた速度で、決められた角度で落下して行きます。鉛の弾丸が止まるのは、泥の厚さがどの位あってどんな所かを知るのは大変に難しい問題ですが、経験がデータを与えてくれます。よろしい。弾丸は底へ行きました。水面の小さな波紋は葦の根元まで行って消えました。水は再び鏡のようになり、雲も歪むことなく写っています。泥の中の弾丸の位置に従って、今はその弾道を復元してみなさい。問題は曖昧です。想像出来る膨大な数の図形が現在の状態を表しています。あなたは現在ではこの種の問題の対象となるのは誰であるのかの印象を私に与えます。そして、あなたが愚かでないから、私はあなたが私たちに騙していると疑っています」。

彼は私に答えました、「私はあなたに何も隠してない。あなたは正しい。この捜査は全てが無駄だ。犯人は捕まります。何故なら自分の犯罪に関係する新聞記事を沢山収集するでしょうし、あるいは新聞がその事件を書かずに中断している時に犯人はしつこくそのことを話すだろう、あるいは盗んだお金を派手に使うからだ。しかしながら、私たちがここで演じている喜劇が無駄になるなんて信じちゃいけない。犯人は私が考えた結果を大変良く証明することになる。彼は私の代わりに推理するだろう。そして、背後関係やインク壺や振子時計のことを私よりももっと良く知っている。彼の眼には正しいことが分かる。何故ならどのように事が運ばれたのかを知っているからだ。私がそのことを何も理解しなくても記録するものは一連の証拠になるだろうし、彼の想像力の中に痕跡を残すことになるだろう。彼は自分自身を密告することになるだろうし、非常に結構だ。彼は、何か無駄で不器用な行動を取るようになるだろう。私にはそれが分からない。しかし彼は、私がそのことを知っていると思うだろう。私は暗示で彼に働きかけている。そして、例え犬の鳴き声を聞いた兎が注意しなかったとしても、多分、私が笑って猫と遊ぶように彼を弄んでいることは確信して、私が前から分かっていたようにある日、私に言いに来るだろう。〈さあ、私を逮捕しろ。殺したのは私だとあなたは知っているのだから〉。ドストエフスキーの『罪と罰』を読んだことがありますか。コナン・ドイルの作品とは違うことをあなたは良く知ることです」。

(一九〇八年六月八日)

(1) コナン・ドイル(一八五九～一九三〇)の有名は推理小説の英雄であるシャーロック・ホームズは、『シャーロック・ホームズの冒険』で生まれた。

(2) 画家のステネイユと義理の母は、五月末にパリの中心にある自宅で殺された。警察は殺人者を見付けなかったので、最もありそもない噂が広がった。

百二十四 自由意志 (LE LIBLE-ARBITRE)

私は、哲学者たちが人間の自由について話しているのを聞きました。私たちは説明手段として、騎兵隊が小走りに縦列を作って進むこと、ビュリダンの驢馬(1)、動機の数々、物理の法則、最後には凡そ二十世紀前から賛否が言われていることを全て検討しました。それは七月十四日の閱兵式のように新鮮でした。

私は屋根の向こうの美しい三日月を眺めながら、帰宅して自問しました、私は自分が思考の主人であるか否かを先ず知らなければなりません。それというのも自分が思考の主人でなかったなら、取り返しがつかないからです。

それ故に、私は自分で出来ることをしようと思います。私は満月のことを考えたいと思います、そして考えます。インドのフランス自治領ポンディシェリーのことを考えたいと思います、そして考えます。私は貨幣の流通や為替相場のことを考えてたいと思います、そして考えます。この様にして私の思考は主権者になります。それは大地や大空を踏破します。自分の足で立ち、自分で飛び立ち、小鳥のように自由です。人は私の手を縛ることが出来ますが、思考を縛ることは出来ません。私を監獄へ入れることが出来ますが、私の思考は監獄から脱出します。私の思考は自由です。

ところがそうではなく、私の思考は自由ではありません。私の観念というものは数珠の珠のように繋がっています。私が満月のことを考えたのは、三日月を見たからです。月光は私にインドのフランス自治領ポンディシェリーを考えさせました、何故なら彼の地では月光のことが話されているのを私は聞いたからです。他も推して知るべしです。しかし、論拠が弱いのです。哲学者のずだ袋からそれが出ているのが分かります。高価なものではありません。何故なら私の自由に観念を選択したと仮定してみましょう。その観念と前の観念には何らかの結び付きが何時も見付けることが出来ます。

生まれ、そうではありません。もっと正確に言いましょう。私は中国のことを考えたいと思います。それが良く意味しているのは何でしょうか。確かにそれが意味しているのは、私が中国のことを考えることです。それを考えることもなく、物事を考えたいと思うことも出来ません。それ故に先ず中国のことを考えたいと思い、そして次に考えるということは不可能です。私の意志は私の思考に続きます。それ故に思考が浮かび出る時は、思考が浮かび出て欲しいという考えが浮かび出るからではありません。かくして私の意志は、思考について何も出来ないのが確かであると思います。そこでの疑問は解決されました。今、私は眠りに就くことが出来ます。月よ、お

やすみなさい。

(一九〇八年六月九日)

(1) ジャン・ピュリダン (一三〇〇頃～五八以後) はスコラ哲学者で、ピュリダンの驢馬は飢えて喉が渴いている驢馬は干し草と水のどちらも選択出来ないという寓話。

百二十五 四月には薄着をするな... (EN AVRIL NE TE...)

「四月には薄着をするな」。私たちは毎年、庶民のこの知恵に感心しますし、何世紀も守られて生き続けています。毎年私たちは、太陽が高く戻って来て、再び暖かくなるのを望みます。ところが日が長くなる時は、私たちの家ではまさに刺すような寒さです。そして三月二十日頃に、昼が夜の長さと同じになる時、コー地方 (1) の台地に何故冷え切った微風が吹き、河岸にも連続して降下して来てサン＝スヴェ (2) の蒸気を一掃させるのか、私たちには分かりません。

しかしながら、大地がゆっくりと冷たくなったり暖かくなったりするのを理解するのは容易です。大地と、それよりも沢山あるのが水です。そして、水の温度を一度上げるには、大地を一度上げる熱の原子量が少なくとも三十倍なければなりません。それ故に太陽光線が春になっても、地球上の春は遅いです。

考えるべきことが他にもあります。太陽熱の最初の効果は取分け、北回帰線の辺り、つまりフランスと比べて南にある地方で感じられます。そこでは暖められた空気が、台所のレンジの上方へ昇って行くのが分かるように真っ直ぐに上昇します。この熱くて軽い空気は、私たちの頭上1キロメートルの処を極地方面へ旅立ちます。その間にそれよりも重い冷たい空気は、暖かい空気と反対に地表を極地から赤道方面へ流れて私たちの肩越しを通ります。この様にして春分の頃の太陽熱の最初の効果は、私たちを体の芯まで冷やします。北極の大浮氷群が崩れる時、氷の山に吹く風と同じ風が私たちの処まで少し遅れてやって来るのも考慮に入れて下さい。以上のことから、太陽は暖かくなならないね、と毎年私たちが言っているのです。

ところで庶民の知恵は、そのことに無知ではありません。どうして無知になるのでしょうか。どうして共通の記憶は、経験の中にある確かなものとは別のものを記録出来るのでしょうか。少なくとも、私たちが伝統を軽蔑させているものは、本当のところは愚か者なのです。彼の話は事件によって立証されます。しかし、それらの事件は支離滅裂な話なのです。私たちは絶対に風邪をひきたくありません。しかし、風邪のことは知りたくもあります。伝承は肉体には為になって良いものですが、精神には悪いものです。伝承はその儘で〈歴史〉に従って行動しますが、〈理性〉に従って思考しなければなりません。

(一九〇八年六月十日)

(1) コー地方は、フランス北西部のノルマンディー地方のセーヌ河口の北方にある泥土地域。

(2) サン＝スヴェは、フランス南西部の町モン＝ド＝マルサンの南、アドゥール川左岸沿いにある町。

百二十六 宗教的体験 (L'EXPÉRIENCE RELIGIEUSE)

私は最近、〈宗教的体験〉について話を聞きました。この対義結合には既に色々な意味が含まれています。それは〈宗教〉と〈科学〉が似ていることを示していますし、〈科学〉は街灯の大きな明かりを消し、〈宗教〉は豆ランプの明かりを灯します。従って、〈科学〉が歴史の中で見えなくなっている間、〈宗教〉は積極的な方法で白日の下に〈神〉を試します。

宗教的体験のことを人があなたに話す時、あなたは直ぐに奇跡を点検して調べようと考えます。死者が起きて歩いたとか、切断した足が元に戻ったとか、その日の新聞記事になって一時間で送信されて、ヌーメア (1) とか少なくともマルセイユで印刷されます。しかし、そんなことは決して重要ではありません。信者たちは、その様な記事が掲載された時、その様な行為は既に信じる者たちにしか納得させられないと理解し始めます。無線電信によって、私たちの〈神〉は黒人の〈神〉よりも真実であると示すことが出来ます。ところで、この奇跡は何でもないことが私たちには全て分かっていることなので、タンブラーから小球を出す手品のように〈神〉を証明することは断念せざるを得ません。

残されているのは内面的な体験です。〈神〉を証明する精神現象があると彼らは言います。或る人が私たちに次のように言いました、「私は不幸だった。人生の悪に耐える勇気が私にはなかった。日々の労働は私には退屈で無駄なように思えた。人間たちの悪意と不正義が私の心を押つぶした。私はもう生きたくないと感じた。その時、良き司祭の忠告に従って、信仰と祈りと聖典を読んで瞑想する道に這入った。それ故、数日後に自我の中に奇跡が起きた。突然に、自我の中に〈神〉の存在を理解し、同時に何時までも変わらない喜びがしみ込んだ。私は恩寵を感じた。それは本当だ」。

よろしい、それは本当です。そして、私はそのことを直接見た訳ではありませんが、本当だったと十分に認めたいと思います。だが、何を証明するのですか。はっきりしていることは、信じることは良いことであると証明することです。この信仰が何ものかに繋がっていることは、何も証明していません。病人の病気は軽くなり、パン屑の丸薬で治るようになります。そのことは信仰が胃や腸に効くことを示していますが、丸薬の中にパン屑以外のものがあっても全然証明されていません。そして最後には、幸せに違いない酔っ払いやモルヒネ中毒患者に出会うことになります。それは何を証明していることになるのでしょうか。

(一九〇八年六月十一日)

(1) ニューメアは、南西太平洋のフランス領ニューカレドニアの中心都市。

もしも人があなたの前で苦しんでいたとするなら、もしも人が恐ろしくなってあなたに叫び声を上げたとしたなら、もしも私たちが血や怪我を見たとするなら、その時はその人と殆ど同じ苦痛を味わうでしょう。私たちは苦しみを少なくするためには何でもやりますし、冷血漢を殺しそうです。しかし、もしも彼が少しでも苦しみをあなたに話したとしても、あなたはそれを決して信じないでしょう。あなたは抽象的な観念しか持ちません。せいぜい芝居を見ているように心を動かされるだけです。如何なる言葉もその苦しみを表せません。

それには勇気ある男たちになることです。彼らは苦しみを多く信じません。苦しみがやって来る時、予期出来そうなことが長い時間をかけてやって来る時でも、その苦しみは一人で感じるしかありません。決して正確に人に話すことは出来ません。殆ど何時も、少なくともそのことを話すことが出来る前に死んで仕舞います、抹殺された人生が何よりの証拠です。

男たちはガリー船を漕ぐ刑に服しました。そのことはあなたをびっくりさせます。如何にして彼らはそれに耐えたのでしょうか。最早簡単なことは1つもありません。彼らは腰掛に繋がれて、数か月後にそこで死にました。肌は裂け、骨が露出していました。次に別の者が繋がれて、同じ様に死にました。最も臆病な者がこの様にして死にます。最も勇気ある者もこの様にして死にます。苦痛は私たちとは関係なく構わずに増大して行きます。人間は動物になって耐えることになります。

生きている限り、誰でも皆が希望を少しは持っていました。苦痛の間、誰にも耐える力があります。人には我慢していることを口に出して言う権利があります。しかし、如何なることが出来たのでしょうか。英雄とは、自ら進んで苦悩に身をさらす人のことです。しかし殆ど何時もそれに身をさらす瞬間には、既に苦悩を感じません。そして苦悩を感じても、最早逆戻りも出来ません。そんな時の英雄は苦しみ泣き叫ぶ哀れなもので、苦しみ泣き叫ぶガリー船を漕ぐ囚人のようです。偉大なる副王は腹を出して、傷付いた動物の顔になって、その苦痛から彼は少なくとも英雄の軽率さに後悔する時間を与えなかつたらうと思います。私は戦争のことを話す死者たちの言葉を聞きたいと思います。

(一九〇八年六月十四日)

百二十八 ドレフュス事件とそれらの主張 (L'AFFAIRE DREYFUS; LES THÈSES)

もしもドレフュスを傷付けた者が裁判所に召喚されたなら、あの有名な訴訟でもう一度ドレフュスを必然的に弁護することになります。そして私たちは、お互いに対立した頑固な二つの主張を思い出します。

一方の人々は次の様に言うでしょう、「彼は有罪だった。しかし、我々はそれを証明出来なかった。それは国家の一大事で、全てのドアを閉めて権限のある国家権力によって、最高の権威をもって取り扱わなければならなかった。この手続きを受け入れたくなかつた者たちは、国民の

敵である。彼らは〈祖国〉の安全が最高法規であることを忘れている」。

この論証に対して、決してやりもしない行いについての退屈な議論を避けたいならば、余分な枝葉を削り、本質に帰して行為に対応するものしか私は理解しません。それは次の様に言わねばならないことです、「国家権力による全ての行為は、白日の下で、点検出来るやり方で行われなければならない。あなた方は或る男を告発します。その男の証拠を握っていますが、示すことが出来ないとあなた方は言います。まあ、あなた方は中傷家なのであり、その男は無罪です。かくして私たちは無罪と中傷を明白にします。法的に事実になり得ないものは、全てが無効です。法律のこの規定を認めたくない者たちは、国民の敵です。個人の安全が最高法規であることを忘れているのです」。

弁護はこの様にして骨格部分に入り、原則が明らかに見えてくるようになります。国家の権限や安全に助けを求める人々は、君主制擁護者です。君主制は外国人には素晴らしいのですが、市民には恐るべきものです。それは蜜蜂の巣に似ています。もしも君主制が正しく行われるなら、社会の安全を保証します。しかし、嫌疑をかけられた個人にとっては最悪です。傷付いた蜜蜂には最悪です。〈祖国〉のために死ななければならず、単に戦う機会が無いばかりか、その上更にバスチーユ監獄の独房か悪魔島です。

何でも議論して光を当てて明らかにする人々が、民主主義者たちです。彼らの眼には信頼があるばかりで、恐るべきものは何もありません、つまり精神の眠りがありません。蜜蜂の一生は成り損ないの一生であり、そのことを理解するのを諦めて、あるが儘の一生を持ち続ける男は動物的部分に自分自身の最も高貴なものを犠牲にして、生きて行くためにはまさに人生の価値あるものを放棄している、と民主主義者たちは判断します。彼らは〈祖国〉を愛していないと告発されますが、自分でも理解しています。何故なら彼らは幾つもの状況に置かれるからです。〈祖国〉の名の下に彼らが愛しているものは、〈正義〉であり〈自由〉です。

(一九〇八年六月二三日)

百二十九 私たちは未開人のように議論する (NOUS DISCUTONS COMME DES SAUVAGES)

民主主義の習慣をすっかり形成する時には変えるべきことが多くあるでしょうが、取分け議論のやり方を変えるべきです。君主制の時代は、現代もそうですが、議論はボクシングの試合に似ていて、演説者は相手のみぞおちを打つことしか考えません。もしも相手が青ざめ、よろめき、地面に伸びれば、その時は聴衆は手を打って次の様に叫ぶでしょう、「ブラボー、やった、やった」。

モロッコ問題を再び持ち出す度に、議会で行われることを見て下さい。満足しない不満の代議士がおりますが、彼は政府の行動を批判し、あれこれ推測して問題を提起し、自分の権利を利用して何でも重大にします。政府というボクサーはそれをやり過ぎ、返答を避けて一回転しては

と思わせるために腕を伸ばします。代議士は〈プロシア人〉とかそれに近い人物のことを言います。奇妙なことを言うこの人物は、罵詈雑言で議論をすり替えますが、外へは投げ出されません。多分、最も奇妙なことというのは、彼の相手はまるで罵詈雑言が主張を弱らせて、世の中で最も小さなものになったかの如くその攻撃に屈服することです。それはどんな風に真面目な人間たちが議論しているかですが、その時に問題になっていることは平和か戦争かです。悲しいことに私たちは、平和について議論することさえ知らないのです。そして、討議しても既に戦闘です。この品のない言葉というものは、相手が同意したことを言うために出来る限りの大きな音を両手で立てることにあるのではないのでしょうか。理性ある人間の言葉は、曲芸師がやる爪先での回転や俳優の颯めっ面のように自然に受け入れられます。それは未開人の習慣でもあります。プラトンが強調して言ったように、もしも部屋が反響するなら、壁の石も自然に同意していることになります。

この喧騒や戦闘において、情熱の主人になるのは如何なる人間なのでしょうか。如何なる雄弁家が、闘牛場の雄牛のように唸るのを止められるのでしょうか。私としては、民衆大学で何時も望んだことは、今とは違う慣習を守ることであり、そして私は何時も或る種の罵詈雑言のように拍手喝采は拒絶して来ました。何故ならそれは単に人の気に入られようとする事、それに成功して満足することを思い描いていると話す者を、真に侮辱することにもなるからです。私が胃に一撃を食らった時と同様に、古くからの修辞学の法則に従って私は何時もボクサーが話すように笑いながら「パンチに耐えること」に専念して来ました。或る男が、宗教から自由な人間の集会で或る日話をして、自分の意見を自由に言いました。演説家は論証する代わりに、大変巧みに彼を攻撃しました。「その時、あなたは労働者を愛していない」と言いました。その男は「はい、私は労働者を決して愛さない。私は友人を愛している。そして世界が公平であることを望んでいる」と答えました。全員がその教訓を理解しましたし、その演説家も同じ様に理解しました。

(一九〇八年六月二九日)

百三十 司法調査と歴史 (ENQUÊT JUDICIAIRES ET HISTOIRE)

これは絶えずある光景です。一軒の農家が燃えています。列になして駆けつける人々の中に近くの城主の息子がおり、全く簡素な身なりをした若者です。皆のように彼も憲兵の命令に従いますが、高級将校の一言が彼には余り理性的とは思えなかったので、少しも侮辱的では無い言葉で大声で答えます。高級将校は良く聞かずに悪く解釈して、その若者を留置場へ入れます。彼は歴史的真相を明らかにしようと大いに試みましたが、しかし、何ということでしょうか。証人たちは間違っただけで聞いていました。高級将校は大変はっきりと聞いて、言ったことは分かっていたと主張しました。そして被告の証言は、罪を自白する時でなければ決して取り上げませんでした。それ故に、その国の法律に従って彼は監獄に這入りました。

その時彼は無駄であっても、正義の力に頼って別の方法を使いました。監獄の格子を通り抜けて、父親へ伝言を送りました。直ぐに城主がやって来て、自分で見て息子だと分かりました。その時、新しい事実の光が証言となって事件を明るみにしました。幾つもの記録が人々の眼によって読まれます。本当らしいことが議論の時に持ち出されるようになります、何故なら歴史に書かれるのもその様なものであるからです。次の様な質問をすることはありません。「言ったのか、あるいは言わなかったのか」。自分を大事にする歴史家という者のやり方でその質問がなされます。「彼は言えたのだろうか」。著名な人々の質問は全てがそこでは動乱に結びついていて、否定的な答えでした。高級将校の彼がその様にして出した質問には、誰も答えませんでした。彼には利益を生む事実しかありませんでした。しかし、その事実は過去のことでした。その事実が歴史に入るためには、学問の外へ出て行って仕舞いました。事実は最早、人間のための事実になり得ませんでした。どちらかと言えば、そこには最早事実しかなく、それは高級将校の執拗さでした。しかし、何人もの市長に反対して何が可能だったのでしょうか。被告は自由になりました。そして多分、下らない高級将校が起こさなければ、事件は続けて決して起こりませんでした。

もしも友だちがいない人間が監獄に一度這入れば、長い間そこにいる危険があります。過去の歴史的事実は覆ります。最早、誰もそれを当てに出来ません。無実の人には手段しかありません。もしも無実であり得るのでしたら、偏見には偏見を、そして不正に対しては不正で行動させるのです。

(一九〇八年六月三十日)

(次章へ続く)

百三十一 速度 (VITESSE)

私はパリ西郊で、新型の蒸気機関車を見ましたが、それは今までのものよりも長くて高くてシンプルでした。歯車装置は時計のように仕上がっていました。殆ど音を立てることもなく回転して、全てが無駄なく使用されているように思いますし、まさに繊細そのものです。水蒸気は、火力から受け取った全てのエネルギーをピストンに使い、決して漏れることはありません。エンジンの容易な始動、一定した速度、滑らかな動きの圧力、そして重量のある列車が一分間に二キロも滑るように走るのを私は想像します。その上、巨大な炭水車には燃やす石炭が一杯あることを雄弁に物語っています。

そこには科学の粋があり、多くの計画、多くのテスト、そしてハンマーとヤスリが出す多くの音がありました。何故作ったのでしょうか。多分、パリとル・アブル間の旅行時間を十五分短くするためです。大変に高いお金を払って購入したこの十五分で、幸福な旅行者たちは何をするのでしょうか。多くの人は時間が来るまで駅のホームで過ごします。他の人は、もう少しコーヒーを飲んで十五分を過ごすでしょうし、出発のアナウンスがあるまで新聞を読むかもしれません。利益は何処にあるのでしょうか。利益は誰のためなののでしょうか。

奇妙なことは、もしその列車が速くなく、十五分前に出発するとか十五分遅く到着して少なくとも速い列車よりも十五分多くかかっていることになっても、旅行者は退屈して過ごすことになります。誰でも、このプロポを苦勞して書くのに似て、あるいはトランプで遊んだり、ぼけっとしていたりして、一日に少なくとも十五分は無駄に過ごすことがあります。何故、その時間を客車の中でも使ってはいけないのでしょうか。

客車以上に快適な所は何処にもありません。私は今、高速列車のことを話しているのです。座席は大変に快適で、如何なる安楽椅子よりも快適です。大きな車窓には河や谷や丘や村や町が過ぎて行くのが見えます。小丘の斜面を線路が続き、その線路の上を列車が行き、河を進む舟のように見えます。その地方の豊かさの全てが広がっています。或る時は小麦やライ麦であり、或る時は甜菜畑や精製所です。その次には美しい樹林であり、その次は牧草と牛と馬です。何本もの溝が大地に横たわっているように見えます。そこにあるのは地理学にとっての最高のアルバムであり、あなたは難なく頁を捲って、毎日変わって行くものが見えます、四季によっても変わって行き、刻一刻と変わって行きます。丘々の向こうには雷雨がわき上がって行くのが見え、干し草を積んだ馬車は道を急いで行きます。又、別の日には人々が金粉の中で刈入れ作業をして働き、大気は太陽にふるえています。この様な光景と比肩するものは何でしょうか。

しかし、旅行者は新聞を読んで、ふしだらな版画絵に関心があるようで、時計を見たり、欠伸をしたり、鞆を開けたり閉めたりしています。到着するや否や、辻馬車を呼び、家が火事である

かのように走って行きます。その晩、あなたは彼を劇場で見かけることでしょう。彼は紙に描かれた木々や偽物の収穫物や偽物の鐘楼に感動するのです。そして、閉じ込められたボックス席で傷付いた膝を擦りながら、次の様に言うのでしょうか、「収穫の歌は酷いものだ。でも、あの舞台装飾は悪くない」。

(一九〇八年七月二日)

百三十二 哀れなもの（小魚）（LA PITIÉ (LE PETIT POISSON)）

夏の絵です。川が蛇行しています。じっとして動かない水と銀色の柳が何本かあります。釣り人が素早く釣り糸を上げています。魚がぴちぴちと太陽に光っています。陽気な絵です。穏やかな風俗画です。無邪気な楽しみです。しかし、人間嫌いの人はそのお祭りを邪魔します。彼は言います、「あなたの喜びは、何も見ない盲人になりたいのです。太陽にぴちぴち光っている銀貨のような魚にあなたは感動していますが、それは死にかけている不幸な生き物です」。

釣りをしている慈善家は答えます、「神経質な奴だ、とっとと消えてくれ。もしあなたが言っていることを真に受けたら、生きては行けない。骨付きあばら肉を切っている間、私は柔らかい羊のことを泣かなければならないのだろうか。もし私が哀れな馬が既に力の限界に来ていて、馬小屋から出て来る時には空腹で半分死んだようになっていたと考えるなら、どうして辻馬車に乗ることが出来るだろうか。詩人のこの同情を何処で止めれば良いのだろうか。私たちが動けば、小さな昆虫を殺すことになる。親切が過ぎれば、結局は意地悪になる。もし全てに期待すれば、心が擦り切れて仕舞うと私は言いたい。同胞を愛することだ。そうでない者の苦痛は決して考えないのが正しいことだ」。

沢山の襷がある肩掛けを肩から掛け直して、優美な若い女性が言います、「大変に結構なことですわ。でも、もう少し私たちのために公平であって下さい。あなたはそのことを良く言います。私たちの喜びは極めて少なく、沢山の苦しみを前提としています。この肩掛けも哀れな女性の手で刺繍されたものです。刺繍をするには眼を大変酷使します。工場や仕事場や屋根裏部屋での暗い光景が私には見えます。しかし、あなたが話していることは何であろうと全て根拠が無くて、大変に抽象的です。草の上に飛び出た小魚にとっては大変に全てが寒々しています。脚を強く踏まれて痛そうに鳴く犬は、あなたの話よりも私の心を何時も動かしました。自分の心に鎧を着なければなりません、馬のような動物に涙を流さないようにとあなたは良く言います。しかしあなたは、私が見たことも会ったこともない見知らぬ男や女の労働者について私が泣くことを望んでいるのです。私の眼が黒いうちは、私は痛みが酷くなるように苦痛を生んでいくような酷い哲学者ではありません。あなたの本質には、私の心を開いたり閉じたりする美德が決してありません。あなたが言うように、時として眼を閉じなければ、人は生きて行けません。まあ、如何に私が眼を開けて無駄であっても、私は肩掛けや刺繍を見ます。でも、その仕事ぶりや針は決して見えません。私には職工や刺繍機械が決して見えません。私が自分で示している苦痛を無視した

後で、何故あなたは私が隠している苦痛を見付けに行きたいのですか。生活することとは、人間ではなく、馬車に繋がれた馬の通る道が立派になるようにすることです。全ては、哀れを癒やす私たちに代わって組織化されます。あなたは説教をしても危険を負うものは何もありません。あなたの博愛は、太陽に当たる魚のようにぴちぴちして虚しいものですわ」。

(一九〇八年七月十一日)

百三十三 文学の召使い (VALETS DE LETTRES)

この頃、或る若者が私に打ち明けたのですが、筆一本で生きて行くと決心したこと、厚紙の中に一篇の小説があり、他にも書いているものが一作品あり、人々が望むようになれば新聞掲載になる、と頭の中で考えていました。その男は私には平凡ではないように見えましたので、私はわざわざ彼に説教めいた話をしました。

私は彼に言いました、「仕事が順調に行っている時、創り上げることよりも文学の世界を売り込むことは最早困難ではありません。全てを写して、それらの構図を一寸変えて、沢山の糸の通し方で箎（おさ）を走らせれば良いのです。この様にして、あなたはトリスタン・ベルナルやアルフレッド・カプスのような作品を創りますし、ポール・ブルジェのような作品も同じ様に創ります。これら三つの箎を使用して、あなたは一週間をおしゃれに過ごす織物も創りますし、四季を通じてショーウィンドーに並べます。あなたはそこに止まらないで、勲章も取りたいと言うのを私は聞きます。あなたはレニエとアナトール・フランスを組み合わせ、ルナンまで持ち出します。何故なら作家というものの独創的な特徴を鑑賞するのは最も容易ですが、その作家の違いを見分けるのは最も困難であるからです。それは色々な色が混じっている一本の糸であり、雑色と言うべきものです。モーリス・バレスは自分のタペストリーの中央にそれを入れましたが、自分流の花々をそこへ投げ入れた後でした。あなたはルナンよりも良いものを生むでしょうか。残った所にはバレスのものを少し混ぜるのではないのでしょうか。それは少しばかりもっと難しいことです。しかし、あなたは読んだり調べたりします、あなたは金糸を取り出す布ほぐしの専門家です。あなたから素晴らしいものを私は期待します。それでどうするのでしょうか。あなたは何時も文学の召使いでしかないでしょう。誰かの収入で料理を作るのでしょうか。あなたは恐らく読者に好かれるでしょう。しかし、あなた自身が好きでしょうか。

本の上に本を接木するようなことは、愚かな仕事だと思いなさい。多くの人々がそのことを理解しています。うんざりする代わりに、あなたは雑誌社や出版社を走り回り、整理棚には写しが丸まっていて、僅かな販売のために多くを述べなければなりませんし、あなたの競争相手の散文を苦々しく思わないこともなく、次の様に言いながら読まなければなりません。「私と同じ様にアルルカンの服を作る者がもう一人いる」。というのも彼は、アルルカンではなくて平凡が最高に良いことを決して忘れていないからです。

もし文学で幸福になりたいのなら、あなたのために考え、あなたのために書きなさい。芸術は

職業になることを望みません。寧ろ、役に立たない労働者になりなさい。あるいは能力に従って郡長のようになりなさい。そして、ゆっくりと心ゆくまで書きなさい。栄光に向かう道は、これ以外は決してありません。栄光がその人間を決して豊かにしないことはあり得ます。スタンダールは『赤と黒』と『パルムの僧院』の二つの小説を書きました。前者は、今まで書かれて来た二冊ないし三冊の最高傑作の一冊であり、後者は最も美しい作品ですが多分第二級のものであります。しかし、誰がこれらの小説を読んでいたのでしょうか。誰が読むのでしょうか。スタンダールは一銭も貰っていませんでした。しかしながら、スタンダールという栄光を自分のために望むことは大変な野心になると私は考えます。ところで、あなたの狙いがそこにあるとするなら、二つの目的を忘れさせることになり得ます。一つは人気であり、もう一つは素質です。もしもあなたが若さゆえの特有の魅力を持っているとするなら、愚かになるためだったらそれを使いなさい。本を創るためなら使わないことです」。

(一九〇八年七月十五日)

百三十四 謙遜と思い上がり (MODESTES ET ORGUEILLEUX)

モラリストたちが感嘆した人間を順番に思い描くことは良くあることです。私には、それは間違った見方のように思います。全く反対であり、殆どの人々は彼らの実際の実態はより低いと思っています。殆どの人々は、身近な人が書いたものや話したことを、思った以上に沢山感嘆します。

そうです、何の価値もない三文小説や芝居においても、優れた考えを持った人物を彼らの知識や才能から思い描くことが出来ます、戦闘中のお喋りからも分かりますし、全ての主題に浮かび出ています。その様な人物を私は決して理解しませんでした。私が知り合いになった学者とか文学者とか演劇家とか哲学者の彼らは、私には寧ろ不安そうに見えましたし、自分自身に対して疑い深く、人が言うことを聞いてばかりいる聞き上手であり、思想の蒐集家であり、自分の話に慎重であるように見え、艶っぽい老女たちのどぎつい光を恐れるように自由な議論を避けているように見えました。誰もが光を背に向けて話をしますし、顔に白粉を塗るように扇形に言葉を広げて行きます。

この観察は、仕事をする人々の情熱を理解する助けになります。彼らは羨みます、何故なら慎み深いからです。まさに彼らは他人の作品が余りにがっしりとしていると信じている理由から、他人の作品を解体します。そして、何故わんわん吠える子犬のように、議論に興奮するのでしょうか。全く簡単です、叩かれるのが彼らはとても恐いのです。

同じ様な理由から、彼らは世評や勲章に沢山の価値を与えます。もしも一人の詩人が好きになりたいのなら、何でもない詩句を称賛しなければならなくなると私は気付きました。そして、それらの詩句は語順転倒や韻律を整えるための意味のない言葉で創られていることをあなたは知ることになるでしょう。そして詩人は喜びます、何故なら詩人は「それ故に、自分が分からない」

と独り言を言うからです。雄弁家や俳優たちは、そうした人間です。彼らは上品に頭を上げて行きます。しかし、その内側には拍手喝采の祝砲やアンコールを計算しています。彼は自問します、「私は昨年当たっていたと思う。余り長く続かないのだろうか」。その時に、もし彼らに気に入って貰いたいのなら、彼らの処へ走って行って、両手を握り、次の様に言わねばならないのでしょうか。「あなたは素晴らしかった。この一時間が私には十分間のようなようだった。あなたのこと、あなたの才能やあなたの成功のことしか話題になっていません」。直ぐに芸術家は生き生きとしてほっとします。彼は有益な意見のための門戸を全て解放しますが、それは彼の意見を置き去りにさせます。

自分が行うことを時々満足するような人間は重要でしょうか。次のように独り言を言う人間も重要でしょうか。「私はこれを知っている。私はあれを理解している。そこにあるのは良く書かれた頁だ」。私は彼が孤立して存在しているかどうか知りません。しかし、もし私が彼と知り合いでなかったならば、決して称賛しようとはしないでしよう。私の意見は直ぐに彼を軽視するのがはっきり分かるでしょうし、もし私の讃辞が彼に何らかの効果を与えたとしても、それは彼が満足しなかった文章とか巧みに説明した観念を私が褒めたからであって、それを十分に理解することはありません。そして彼が私の讃辞を受けるのは、脚を泥だらけにした愚鈍な犬に、ペロペロ舐められて愛撫されているのに殆ど似ています。そこにあるのは本物の思い上がりであり、あなたは殆どそれに気付いていないのです。

(一九〇八年七月二一日)

百三十五 恐怖と夜 (LA PEUR ET LA NUIT)

社会学者が私に言いました、「どんな社会機構も食べたり服を着たりする必要性によって理解しようと試みられるだろうし、〈経済〉が支配して説明することはその時は全く余分なことで、少なくとも機構の必要性は食べることの必要性以前のものであるのは確かなようだ。幸福な未開人たちは服を着る必要がなく、手を伸ばせば食糧を摘めることが分かる。ところで、彼らにも王や司祭や学校や法律や警官がおります。そこから私は結論付けるのだが、人間は自然と市民になるのであり、役所を愛するのは市民自身のためである」。

私は彼に言いました、「私は別の結論を下すのですが、〈経済〉は必要性の第一歩ではないということです。睡眠は空腹よりも大変に我慢出来ないものです。人間は空腹になっても我慢出来ます。しかし、何人も眠らないではられません。その彼が大変に強くて大胆な人であるなら、そんなことを自覚することもないでしょう。従って、防衛策もなく、殆どその間は当事者でないような生活を送るのでしょう。それ故に最大の心配事が、必要性から齎されるのは確かなことのようにです。彼は睡眠と目覚めを計画的に上手く組織立てます。一方で見張りをして、他方では眠っていました。その様なことは都市として最初に考えられるデザインでした。都市は経済的に考える前に、軍事的なものでした。あなたが話しているこれらの自然発生的条件は、隣国人や野獣

や蛇に対して防御すべきものでした。〈社会〉は恐怖から生まれた娘であると私は思いますし、空腹ではありません。もっと正確に言うなら、空腹による最初の結果は、人々を集結させることよりも寧ろ四散させたに違いありませんし、全ての人々は食糧を探しに色々な所へ行くでしょうし、探検する人は少ないでしょう。少なくとも、欲望は人々を四散させますし、それに対して恐怖は人々を集結させます。朝に空腹を感じた人々はアナーキストになりました。しかし、夕方に疲れや恐怖を感じた人々は法律を愛しました。かくして、あなたは如何にして社会の組織が形成されるのかを理解するために、社会という織物を解くのが気に入るようになります、〈軍事〉関係が人々を支えていることを忘れないで下さい。まるでそれは粗織の布がタペストリーを産んでいるのに似ています」。

彼は言いました、「私たちはそれ故に、次のとおり必要性を整理して順番を付けます。守るべき必要性か、平和の裡に眠るものであるかです。次に、食べる必要性と結局は所有するものであるかですが、空腹を感じる前に想像力を働かせて食べる必要性しかないのは誰でしょうか」。

私は彼に答えました、「あなたは恐怖が閉じ込めているあらゆる美德を恐怖から得ているのかどうか、私には分かりません。睡眠は、不寝番や軍隊の生みの父親です。夢想の父親でもあります。そこから別の恐怖である死や幽霊の恐怖によって宗教が産み出されます。兵隊は野獣を追い払い、司祭は幽霊を追い払いました。兵舎は寺院であり、そのようなものが都市の初めの中心でした。機械や工場が活動するのはずっと後のことです」。

「そして、生殖の必要性は何処にあるのでしょうか」と彼が言いました。

私は彼に言いました、「それを〈経済〉の横に置いて、反社会的な必要性として私は整理します。何故なら両者とも人間が人間に武装するからです。しかし、睡眠はそれよりももっと力がある王です。太陽は称賛されますが、夜は怖がります。日が落ちると、何故羊飼いの喇叭や羊の群の鐘が私たちの心に大変活発に鳴り響くのか、以上でお分かりのことと思います。おゝ夜よ、あなたは都会の女王です」。

(一九〇八年七月二日)

百三十六 人生はメカニズムである (LA VIE EST MÉCANISME)

その哲学者は次のように結論を引き出しました、「メカニズムは機械的に説明されていることだが、科学の結合はそのように望んだとしてもどうだか分からないし、メカニズムの歯車は大変に小さなものでしかない、と私は理解している。しかし、あなたが人生を一つのメカニズムに帰着させる時、その時はあなたを引き止める。人生とは何か、如何にして生まれて、生き続けているのか、私たちには分からない。それは謎であり、決して計算には適しない何か未知の力であり、私たちの予想を裏切るものである。狂人とか激怒した人の力を如何に思うのだろうか。如何なる限界まで勇氣は人間の肉体的力を高めることが出来るであろうか。病気とか疲弊した体にとって、精神的な意志は如何なる影響を与える帝国になるのだろうか。誰もそれを言うことが出来

ない。そして、ここで事実によって打ち消される無謀な仮説を何故立てるのだろうか」。

このように哲学者は話しました。そして、手回しオルガンのハンドルを回しているように見えました。この古いシャンソンを聴きながら、皆が手拍子をとっていました。しかし、今度は優れた化学者が発言しました。

「私たちは人生というものが分からないことを、私は認めます。それが人生のことを話さない理由なのではないでしょうか。その理屈で言うなら、私たちは大したことは言わないのでしょうか。砂糖水の入ったコップの中で起こることが私たちに分かるのでしょうか(1)。酸素と水素がその中でどのように混じるのか、私たちには分かるのでしょうか。原子のことを話しているのですが、私たちが行えるのは仮説です。電気や熱や光というものも何であるか、私たちには分かりません。普遍的重さとは、手際の良い便利な仮定でしかありません。或る意味では、私たちは全く何も知りません。そのことは、これから起きることを予見するために、現在起きていることを判断するのを妨げるものでもありません。

ところで、生命力とは何であるのか、私が全く知らないのが本当であっても、その効果や状態を判断して測ることが出来ないというのは、真実ではありません。人間が長い間食べることなく大仕事をやるようになることは、決してありません。沢山の熱とか、もし望むなら脂肪や砂糖のようにエネルギーを含んで閉じ込めている肉体が、別な風に人間の力が保たれているものも決してありません。しかしもっと正確に言うなら、色々な食料に含まれているエネルギーがどの位あるのか正確に量るのは簡単です。その上で限りなく労働が行われて来たのであり、誰も無知の儘でいることは出来ません。何故なら新聞がそれを書くからです。人間が産んだ熱や、労働の上で産むことが出来た経験の全てが確認されて益々良くなって行くことは、所謂生命力は供給されるエネルギーを食料に変えることであって、言い足すことは何もありません。生きている人は機械であると私が言うなら、それ以上の意味は何もありません。無謀な仮説を立てているのはあなたであり、私ではありません」。

(一九〇八年七月二四日)

(1) ベルグソンを暗示していると思われる。『創造的進化』の出版は一九〇七年である。

百三十七 彫像には音楽家がいる！(UNE STATUE A UN MUSICIEN !)

ベートーヴェンの彫像は今でも建てられます。私は鈍重な彫刻家が創っているものを想像します。良く知られている巨匠の頭、堂々としたポーズ、壊れたヴァイオリン、腹部の肌から分かる記念建造物の詩的靈感、そしてその他のみすぼらしさです。それにも拘わらず、彫刻家がこの音楽の精神をがっちりとした形式に翻訳し把握することが何故出来るのか、私には分かりません。その彫刻家が何かに役立つとするなら、彫ることだけです。

そして、この上なく完璧な才能とはベートーヴェン自身のことですが、大理石で音楽を創る訳にはいきません。言葉でも駄目です。それ故にもしベートーヴェンが有名になって愛されて皆か

ら崇拜されて欲しいとあなたが思うなら、胸像を見せる必要はありません。彼の音楽を聴かせなければなりません。

小説家や劇作家や詩人にとっても同じです。彼らの真のイメージは作品の中にあります。もしも大理石のバルザックの代わりに、紙の中にバルザックを与えたなら、美しいバルザックが的確に印刷されて読みやすくなり、一冊が十スーで済み、膨大な作品をバルザックの栄光あるものに高めたと言えます。直ぐに鳥たちに汚される白人男の彫像は、何を私たちにしてくれるのでしょうか。バルザックが生きていた時代には、多くの思想や感情やイメージを、彼の眼や身振りや額に読むために熱心な観察者にならなければならなかったと思います。不動で見る眼を持たないこの大理石の中から、私が発見出来るその人とは何であり、何を知っているのでしょうか。私は、只同然で、フロベールをティエール通りの小公園へ見に行くことが出来ます。しかし、何を見に行くのでしょうか。それは私が知った多くのノルマンディー人たちを偲ばせてくれます。でも、『感情教育』や『ブーヴァールとペキュシェ』の小説については何も教えてくれません。もしも今、歴史小説の『サランボー』を読んだり、読み直したいと思うなら、三フラン五十サンチームと引き替えに蠟燭の明かりで読む本と恐ろしい人間たちの性格を手に入れるでしょう。私が買物に行く食料品店の本の〈市価〉は大変はっきりと印刷されています。そのことは偉大なる人物を如何に大切にしているかが分かります。駅の売店へ行って下さい。赤い表紙のバルザックの本を一冊買って下さい。本を読んだあなたは、彫刻家たちや彼らが消費した時間やそのために私たちが払ったお金を呪うでしょう。

もしもあなたが彫像を必要とするなら、その時はスポーツ選手とか俳優とか美しい娘とかのイメージを真似るでしょうし、それらの美しさは見た目にも心地よいものです。でも、それらの彫像は何時か消滅します。毎日消滅しているのです。大理石とか青銅で普及版を急いで創りなさい。しかし、画家を表すのに上着やベレー帽やパレットで表すのは止めて下さい。彼らの作品で表して下さい。あるいはその精巧なコピーを沢山創って下さい。そうすれば安い値段で人々は手に入れることが出来ます。何故なら彼は美しい刈り取る人々を描いたのであり、私は毎日彼の長髪や山羊ひげに関心せずにはられないからです。それらは美しい絵画であって、彼ではないのです。

(一九〇八年八月二日)

百三十八 精神の自由は稀有 (LIBERTÉ D'ESPRIT, RARE)

精神の自由は稀有です。それを磨き屢々、逆説にまで批評精神を押し進める人々自身は、突然子供のような純真さに戻ります。彼らはあなたに、愚かであったりせつかちであったりする価値判断を示して嘲笑します。その直後に更に、手本となるものの話を持ち出しますが、それを望んだりしません。それはあなたに進むべき道を示しながら、墮落して行く指導者のようなものであるか、盗みを働いている警官のようなものです。

私は大変に納得のいく一冊の本を読んだところですが、それは権力や慣習や精神の懶惰に対して警戒するように主張しています。彼はN光線を発見した優秀な物理学者を例に出します。彼の後には他の観察者がこの新しい光線を研究し、それらを電気的作用に委ねたり、プリズムの中を通したり、光線の錯行を測ったりします、要するにそこでは実際に確実な観察方法を実施しました。人が知る限り、この問題の光線は実際には存在しません。この引用は良い例です。私はこのことを歴史家に忠告しますが、彼は証言に沿って過去の事件を復元することを強く望みます。私たちはN光線の証拠を幾つも持っており、それらは優れた証拠であり、専門的で知的で正しいものです。そして、私たちの善意を裏切ります。私たちは決して十分に反省しませんし、疑いもしません。

私はその本の頁を捲り、未だ英知から遠いこと、實用よりもっと良いものを奨励することをその著者は私に示しています。彼は次のように書いています。「パストゥール以前には、何の前触れもなく詩句は生まれ、肉は腐ると信じられていました。自然発生的に生殖するという考え方でした。しかし、この偉大な化学者は何事も全てが原因となる芽の齎したものであることを示します」。私はこの馬鹿げた結論を主張し続けます。何故なら、至る所で少しはそのことが見付かるからです。パストゥールは、同類のものを何も見付けなかったのは確かです。スープや尿が入ったフラスコを見せて、空気中に放って置かれると微生物で一杯になることを示します。パストゥールは非常に簡単に想像出来る実験によって、もしも熱して全ての細菌が消滅するようにして元に戻らないようにしたなら、微生物は決して生まれぬことを立証しました。その場合、それは少なくとも生物は胚珠から生まれることを立証しておりますが、立証出来ないことは全ての生物がまさに単純に出来ていて一つの細胞から形づくられて一つの胚珠から何時も生まれていることです。

この結論は本当らしくないようでもあります。何故なら人が知る限り、地球は初め溶岩の塊であったからです。その次に地表が冷えて生物が生まれました。慎重な料理人である〈神〉が生物を生む瞬間を待っていたとあなたは仮定するでしょうか。或る時代に、海が少し塩分を含み、もっと温度が高くなって光の放射が沢山行われ、あるいはお望みなら今では幾らでも使われている電気が発生して、今日の結晶体が形づくられるように生命が生まれたのだと仮定する方がより理性的です。いずれにしても、パストゥールの実験は、それが不可能なことを立証していません。如何なる実験もそこまでは行けません。実験はその通りであると理解されることであって、それが別のものであり得ないということを理解させられません。しかし、パストゥールは飛躍に駆られてカーブでスリップしたようなもので、窮地に陥って仕舞いました。

(一九〇八年八月四日)

百三十九 学士号を取る術 (L'ART DE PASSER LA LICENCE)

トト氏は、大学入学資格者です。彼は大した苦勞もしないで合格の評価を受けました。この最

初の勝利が全て誇張されて、油を体に塗って他の闘いのためのトレーニングを行っています。文学士になることを私にそっと言いました。既に、バカンス中にやる勉強の準備をしていて、頭の中は聖遺物が入った小箱のようです。風車小屋の驢馬のように愚か者は〈高等教育〉の学校へ入学しません。

私は彼に言いました、「トトよ、心配しないで下さい。あなたは苦労が始まったような気ですが、終わったのです。バカロレア（大学入学資格）は厳しい試験でした。少なくとも、敢えて敢然と立ち向かう青春時代の美しい勇気があなたになければなりません。あなたは科学や文学の全てを覚え、それらを書いたり話したりすることが要求されました。あなたは解答して成長し飛躍したと私は理解しましたが、まるで風で揺れる木の上を走るリスのようです。それは素晴らしい勉強で、一年間の勉強として最早やることはありません。歳を取ると人間は億劫になります。

だがその上更に、あなたは曲芸をしたり、ばらばらに分解する場合にはありません。今は、一人前の人間になることが要求されます。脅えることはありません。そんなに難しいことはありません。礼儀正しくすること、時間を守ること、そして退屈を我慢するの覚えることしか重要なことはありません。あなたは話をしたり書いたりするようになるに違いない本の一覧を手にするでしょう。それらの本の一冊一冊が細心な人間によって説明されるでしょう、彼はあなたに何も自由に創らせませんし、更にその上同じことを百回も繰返し言うでしょう。百回に対して三回聞いても、あなたは逃げ出すでしょう。でも、少なくとも授業時間は忘れないで受けて下さい。これらの尊敬すべき人々が学校には少しいて、自分の子供のように愛しています。ですから出席して、時には頭を上下に動かして納得し、ノートを殴り書きして、頬笑むべき処では頬笑んで下さい。

勿論、もっと向上し進歩して下さい。彼らの家へも見に行ってください。〈方針〉を彼らに要求して下さい。あなたは言うことを予め考えないで下さい。それは大変無駄なことです。彼らは何時でも話します。一言で言うなら、弟子になることです、そしてあなたの先生は試験の日を決めます。あなたがバカロレアを合格した時に、大袈裟で冷たく退屈だと思ったその人間と、学士号の候補者となった時にお人好しで全く明るく晴れやかだと思ったその人間とは同一の人間であり、あなたは彼の家のオーク材のテーブルで始めた会話を続けるでしょう。そして、あなたは間違えることを恐れてはいけません。間違っている、笑われるだけです。間違わない人がいるでしょうか。友だちのトトよ、今からは、礼儀に反した間違いは最早あなたには何もないのです。

あなたが実力ある人々を尊敬すること、権威に耐えること、人の話を聞くこと、形式を検討すること、意見を変えなければならない時には意見を変えること、無礼な青春にはさよならを言うことを覚えるなら、あなたは人々を教えるために成熟し、先生たちから教えられて来た文学や芸術の光輝く松明で彼らを通すでしょう。何故なら覚えるだけでは十分でないからです。教養がなければなりませんし、良いセンスを持っていなければならないからです。話しながら考え出す習慣を無くさなければなりません、習慣に対しては理性に高めなければなりません。そして、それが出来るようになる時は、信仰のようになります。それ故に、お祈りを何度も言い、ソルボンヌ

のミサに参加する支度をしなさい。その後で、お祈りを言うでしょう。あなたの子供時代は終わりです。今は、人間としてのあなたの仕事を覚えて下さい」。

(一九〇八年八月五日)

百四十 戦争の情熱 (LES PASSIONS GUERRIERES)

その哲学者は言いました、「人間には平和が何時か確立できる、とそこまで私は思っていない。血が度々流れないために、欲望が余りに大きくなって善が余りに小さくなることを、私は何時も恐れている。食べる物が何でも増えて誰でも手に入りさえすれば、美しい女性たちが世界中にそんなにも沢山いることもないのだが、あのヘレネのためにトロイアが包囲されることは何時でもあり得ることである(1)。それ故に私は戦争を、食欲と欲望の結果として受け入れている。私が恐いのは、理由の無い戦争である。そこには労働者たちがおり、監視人たちがいる。誰もが貧しく、働かざるを得ない。今は、争われるべき如何なる財産もない。しかし、見てご覧なさい。彼らは、通りを遮断する何枚もの板を、一方から他方へ激しく投げつける人々であり、闘犬のように殆ど喜びを抱いていると私は言う。戦争は喜びなのではないだろうか」。

私は彼に答えました、「戦争は喜びですが、私は大変にそれを恐れます。そして恐らく、あらゆる喜びの中で最も大きなものであり、あるいはこう言った方が良ければ、スポーツの中で一番心惹かれるものです。利害の対立として戦争を見ないようにして下さい。利害の対立は、向かい合った人間を対立させることになり、一方は他方の相手から通りを遮断します。しかし、一方が他方に身を投げて関わり合うには、一種の酔いとか怒りを抱く者にならなければなりません、悲しいことにそういう彼らは何処にもおります。人間とは、じっとしていない機械のようなものです。ボクサーたちを見て下さい。彼らは元気よく動き回って顎を痛めます。あなたはこの酔った二人を非難します。けれども彼らはお酒を飲んでいませんし、闘いが終われば握手を交わしているのを眼にするように、相手に対しての礼儀正しきは守っております。しかしそのことは、パンチが厳しくないという訳ではありません。

辻馬車が接触します。直ぐに二人の御者は食って掛かります。拳を握り締めます。お互いに食い入るように見詰めます。それは一つのゲームであるとあなたは言います。多分、そうです。そこではゲームが行われいますが、もしもパンチを出したなら、そのゲームは本気になります。仲の良い友人同士でも、どれ程の口論がこの様にして始まり、ナイフを切りつけて終わることでしょう。トランプのバカラで遊んでいても、剣で決闘もします。何故、二人が決闘するのは尋ねないで下さい。彼らは理由も無く決闘します。何故なら、彼らは生きており頑強であるからで、どんなものにも怒りを抱くからです。カラーを付けてワイシャツのボタンをかける人は、直ぐに腹を立てて歯ぎしりします。整理ダンスの引出しと大変上手に決闘しますが、すねを傷付けて仕舞います。あなたは戦争に反対して弾劾しますが、時間の無駄です。誰も理屈では戦争が嫌いです。しかし、現実には起きています」。

(一九〇八年八月十日)

(1) ヘレネは、ギリシア神話の絶世の美女でスパルタの王妃。トロイアの王子パリスに略奪され、トロイア戦争の原因になった。

(次章に続く)

百四十一 近代主義 (LE MODERNISME)

信者がいること、そして幸福になることは、〈教会〉が有利になる一つの証明であるのは明白です。しかし、そこに信者がいるのでしょうか。信者はそこにいると誰もが私に言います。私には分かりませんでした。ミサに出席する人はおります。しかし、そのことと信者は同じではありません。

信仰が何であるかを知るために、そして信仰があるとすれば、信者と共に開かれた心で話をしなければなりません。しかし、殆どの人々は墓のように沈黙しています。羞恥心とか偽善から沈黙しているのでしょうか。彼らは身を隠します。多分、自分自身のことを実際に話すには、大通りへ素っ裸で出掛けるのと同じ位に不純だと感じているのです。最も大きな奔放さが彼自身の心の奥へ降りて来ないと決して言えないのも確かです。私とその門を叩き続けても無駄でした。その背後に壁のある偽の門を鳴らしているようなものでした。

けれども或る日、顎ひげが長いカトリック教徒と知り合いになりましたが、彼は考えたことを大変上手に言ってくれました。彼の話の要旨は次のとおりです。

彼は言いました、「孤独であると考えや否や、私は道徳を忘れます。私は最早、全く一人ではないと感じます。私は社会の中で思考するのでなければ、人間として思考したことになりません。それ故に私は他人の方へ向かって行きます。他人を求めて私を求めるのですが、へまばかりしています。少なくとも、出来るだけ誠実にやるのですが、直ぐに詭弁に陥ります。何故なら、何もかも信じないで疑うのが正しいと思われるからです、敵たちを狼狽させた時でさえも、彼らが見せた行いは傷口に毒を入れるものでした。私は次第に彼らにも自分にも不満になって行きます。私が悪魔の〈教会〉と呼んでいる敵たちの集まりに参加している時、もしも私が一人であったとしても、それ以上の孤独を感じます。

皆と共通に認められた基本がなければなりませんし、それは思考したり議論するための枠のようなものになるでしょう。科学にとってもそれは真実です。理解力は教育された人間に共通した信仰の中にしか創れません。かの有名なイギリスの哲学者デヴィッド・ヒュームは、原則が壊れるまで錐で沢山の穴を刺して、意味がなくなるのを感じたことを告白しましたが、それは人間の町から追放されたようなものです。まあ、彼にとっては道徳も同じです。何かの原則が議論の外に置かれているか否か、そこには生きている人と義務についての活発な議論しかありません。私はその様な原則を受け入れている人々を探します。〈教会〉の中で彼らを見付けます。〈教会〉の教義は、科学の原則が存在し得ない以上のことを証明することは出来ません。私が少なくとも知っていることは、私が思考するためには彼らが必要であるということです。それらは私の中で自分独自の思考や行為の規範を織りなす枠組みであり、骨格がなければ私は行動しません

。自分と似た者たちと一緒にその集団で教義を創ることは始終あります。彼らが言うことが真実か虚偽かを尋ねることは、意味のない質問になります。私が完全に一人前になって最高の人間に成長する手助けをする限り、彼らは有益であると言えます」。

そのカトリック教徒はこのように言いました。私はそれを聞いて、彼はカトリック教徒ではないと思いました。〈教会〉は教義が有益であることを望んでいません。真実を与えているのであり、それはテーブルという存在があるような真実です。素朴で純真な人の信仰以外は全てが異端なのです。いずれにしても、私の心にある近代主義はローマから非難されたばかりです、何故なら私は異端の一人であるからです。

(一九〇八年八月十八日)

百四十二 ジャンヌ・ダルクの罪 (LE CRIME DE JEANNE D'ARC)

私はアナトール・フランスを読んで、ジャンヌ・ダルクの罪とは何であつたのか、今は良く理解したように思います。彼女は公式の手続きを軽視していました。〈神〉や聖人たちと直接話が出来たと言っていました。ローマ教皇でもそこまで言いませんでした。取分け、当時のローマ教皇はそこまで言わなかつただろうと思います。それは〈神〉の言葉と〈悪魔〉の言葉を聞き分けられる最も賢い者たちに共通していることでした。

〈教会〉の神学者たちは難しい立場にあつた、と認識しなければなりません。彼らにとって神話というものは、組織を作るためのものでした。眼には見えない力があり、それは事の成り行きを急激に変えられるものであると教えました。この原則によって、全てが可能でした。幽霊、占い、遠隔作用、蘇生も可能でした。狂人が夢見た世界は、何でも本当のように見えました。如何なる奇跡も信じました。そのことに注意しなければ狂人が支配することになったでしょう。

如何なる人間社会も、劇場の装飾のようなもので作られた世界では実際に生活出来ないと思います。生きることが重要です。つまり売ること、買うこと、作物を栽培すること、家を建てること、眠ることであり、それは混乱や無秩序よりも寧ろ安定性を前提に思うことです。夜ばかりで実際に太陽が再び顔を出さないと疑つたならば、生活は如何なることになるのでしょうか。人間は悪魔と天使がよく出会う悪夢の中で生きることが出来ませんでした。余りに無理な要求でした。実際の体験でないとしても、取るに足りないものは最早信じないで最後まで生きることです。素晴らしい体験は〈教会〉を滅ぼしたことでしょう。それ故にどんなことがあつても素晴らしい体験にはお金を沢山払い、奇跡にはけちけちなければなりません。そして、それは些細な問題ではありませんでした。〈教会〉の権威というものが問題なのであって、それは全てが威厳であり、聖職者たちの利益であつて、公共の秩序は考えませんでした。大多数の人たちは何時もその秩序とがっちり離れずにいますが、取分け有閑人や物書きがそうです。そこには殺人の熱狂もあります。

私たちの今日は日々快いものですが、やはり秩序を愛しており、事物の中も観念の中も同じ

です。或る人が大発見をしたと公言するなら、私たちにはその証拠が必要であり、事実とか観念が問題になるのに応じて指で触れるとか、頭で理解したいと思います。そして、もしもそれが大変複雑でN光線とか、日常を超越した代数が問題になるのなら、アカデミーと言われる宗教会議へそれを送り返します。例えば、物理学者が生命体から放射能を発見したと言います。彼はそれを写真に撮りました。その協力者たちも物理学者のように言います。でも、私としては疑っています。アカデミーはその体験を検査し、何度も繰り返し行い、間違っていたことを告げます。彼は間違っていた、と私はその時信じます。別の人には限りない沢山の無限を定義し、その点を議論します。私にはこの迷路について行く時間はありません。もっと正確に言うなら、私は自分を見失うことを恐れます。アカデミーの宗教会議の後で、私はそれを判断します。情熱の感情に浮かされないことです。何故なら、この種の間違いには結果が見えないからです。しかし、もしも或る人が自分の心象どおりに、パリを燃やしたいとか、単にエリゼ宮に住んでみたいと思ったならば、彼は狂人と言われるでしょうし、一生を幽閉されます。そのようなことは、現代の私たちにとっての破門であり追放です。

(一九〇八年八月二十日)

百四十三 必要性には人間の顔がある (LA NÉCESSITÉ A VISAGE HUMAIN)

都会の夫人が、今年の八月の涼しさは酷いが、秋の寒さも酷いと嘆いていました。私は彼女に言いました、「秋に涼しくなってもあなたはびっくりしない。今年の八月の寒さも、秋の寒さと同じように自然なのです。何が起きても自然なのです」。季節の支配者が現れて欲しいと思っていたかの如く、彼女は足を踏み鳴らしました。彼女は言いました、「八月は暑くなければいけないわ。今年の意地悪な風は、普通じゃないわ」。私は彼女に次のように言いました、「何もかも普通です。この風も普通の風ですし、太陽と地球の位置によるものです。今朝の風と雲も同じようなもので、昨日の風と雲によるもので、次から次に関係して行きます。あなたの気分が優れなくても何にもなりませんし、あなたに嫌な思いをさせて、更にもっと寒くさせるばかりです」。六十年間も働きづめで、やや腰が曲がっている田舎の老女は、その澄んだ眼を私に向けましたが、それは大地の割れ目に咲いている矢車菊のように見えました。この老女は言いました、「お天気はあるが儘にある。我慢しなければなりません」。

田舎の人々は、〈必然性〉を理解している哲学者よりも多分、もっと生身をもってそれを実感しています。彼らは人間よりも事物により多く依存しています。それ故に、人を非難して告発することよりも、諦めて直ぐに受け入れる方が多いのです。彼らの労働に見合った身分や財産は、霜や雨や太陽次第です。彼らの睡眠は冬に長く、夏は短いです。彼らは生涯を通して諦観し忍従します。

都会の人々は何時も反抗的です。彼らは夏には日と戦い、冬には夜と戦います。彼らの労働は、ガラスの空の下で四季を通して同じ調子で行われます。雨は流れて行きます。雪は掃かれます

。河は石で出来た河岸を上がったり下がったりして、草原に広がって行くことはありません。田舎の人は、小麦が発芽したかどうか、木々に花が咲いたかどうか、小麦が収穫出来るまでになったかどうかを見に行きます。見に行くだけで何も出来ません。見に行くことが働く基本要素なのです。仕事を眺めに行くことがあっても、綿布を作り出すことは決してありません。都会の人間は収穫を必要に応じて決めて、自分自身で手に入れて行きます。

都会にも嵐がない訳ではありません。しかし、それらは人間の嵐であり、苦悩、恐怖、怒りです。〈自然〉は人間の姿をしています。大地は何時も大地ですが、都会の大地は動いたり、叫んだり、泣いたりします。それ故に、私たちは祈ったり、脅したりします。それ故に、私たちはこの世に存在し得ないようなものを信じます。

経営者は、労働者が自分の手を信じているように、工場長を信じています。工場の門は閉じられます。世間の風は決して入って来ません。閉ざされた小さな世界になります。いいえ、そうではありません。価格、供給、交換が、風や潮のように一方から他方の世界へ流れて行きます。各々がバロメーターの箱です。どんな銀行も破産に震えています。希望や恐怖や飢饉には波があります。見抜かなければならない人間の波です。しかし、私には引きつった顔や緊張した拳しか見えません。〈必要性〉が人間の顔を示すようになるや否や、〈必要性〉に嫌な顔をしないことは非常に難しいことなのです。

(一九〇八年八月二二日)

百四十四 自然の中の美 (LE BEAU DANS LA NATURE)

鉄道や工場は美しい景色を台無しにする、と屢々言われています。或る賢者がそのことを大変簡潔に述べています。彼は言いました、「私たちは使い慣れた物、古い皿や家具や家を美しいと思います。良く考えてみると、私たちは新しい物や有益な物が大好きです、例えば自転車やマシンや機関車です。しかし、それらは心の奥には届きません。心が無いのです。私たちの本能は一世紀か二世紀遅れています。昔の廃墟を愛します。それが最も使い易い家であったなら、新しい家は愛されません。私たちはアミアンにあるノートル・ダム聖堂のキリストを愛し、解剖台の板を愛しません。古い形に私たちが愛着を持つのは、行動を分からせてくれるからです。豪華な二人乗りの箱馬車は駕籠を真似た物で、自転車は馬車を真似た物でした。私たちは何時も保守的なものを強く持っています、全て本能的に持っています。人々は飛行機で旅行するよりも、鉄道の旅の景色が美しいでしょう」。

これは技術者の言葉です。しかし、美について十分に意見が述べられていません。海や山のよう、私たちには見て先ず最初に愛する自然の風景があります。少しも気取らない私の友人は、エジプトのピラミッドを見てびっくりし、興奮していました。この事実をも敷衍して行けば、理論化が出来るのでしょうか。しかし、私も証拠を十分に示さなければなりません。

自然の中で人間が作った物に出会うと、私は何時も嬉しくなりますが、それは本能でもあり

ます。森の中央を引き裂くように奥へ進む鋼鉄の四本のレールやトンネルの入口の美しさは、私の心を捕らえます。湖の岸を走る列車が山の中に這入り、雷鳴のような音を立てて少し遠くの方から出て来ますが、それが自然美である限り私の心を動かします。熟考がそこでは何ものかの味方であることを私は否定しません。恐らく多くの人々は、私が感じていることを感じません。何故なら彼らは列車やトンネルや工場を普遍的秩序と結びつけないからです。私としては、人間を自然的な力と理解しています。自然と同じであり、人間の行為は内面からの力であり、火山や雷と同じ必然性があります。

道は美しいものです。古くからある道は何本もの小径に続いていて登ったり降りたりして、迂回路によって魅力あるものになっているに違いありませんでした。一本の道は測量技師によって川面の水と並んで造られ、大胆に横切り、広くなって行きます。道は、その国の視界を広く開けていて、人間の眼にはより良く見えるものです、恐らく足にもより良いものになっているのです。私は地平線まで歩いて行くように思われます。

世界は美しいものに溢れていて、全ての事物は結びついていると私は強く信じています。小さなものたちは何も言いません。感覚もありません。しかし、全てのものに存在理由があるのです。何故なら、全てのものが全てのものに起因して繋がっているからです。人々は海や山を愛します。何故なら、そこでの力強い働きが眼に見えるからです。それは私たちの言葉です。文字の綴りを言った後で読まなければならず、全てのものから全てのものまでの繋がりを一瞥して把握するのを学ばなければなりません。その点で慣習を先んじることが出来ます。もしも〈偉大な書物〉である自然を完璧に読むことを覚えたなら、全てが美しくなるでしょう。

(一九〇八年八月二四日)

百四十五 歴史家の愚行（谷間の百合） (NIAISERIE D'HISTORIEN (LE LIS))

或る人が言いました、「あなたは歴史家たちを認めようとしません。しかし、何故彼らの本を読むのですか。何も無理に読むことはないですよ。彼らがやりたいように楽しませて置きなさい」。言うのは易しいです。泥棒や人殺しも、同様に彼らがやりたいように楽しませて置けないのは何故でしょうか。歴史家たちが誰も殺していないのは、私も知っています。しかし、それでも害が無いとは思いません。彼らは何にでも侵入して、その精神を殆ど単独で形づくっているのを私は知っています。若者たちは、歴史を覚えるのにへとへとになっています。テストというものは、直ぐに歴史のテストになるでしょう。そして一言で言うなら、歴史家たちは私たちの脳に侵入して、知性を殺しているのだと私は思います。そうであるなら何故そのことを言わないのだろうか、と私は思います。

私は歴史家の愚行をあなたに語りたいと思います。もしもバルザックの『谷間の百合』を読んでいなかったなら、読んで下さい。商業文学者たちはこの書物に偏見を持っています。しかし一般的に、公平な読者はそこに強い感動を覚え、自らの心の中で何処までも鳴り響いています。そ

それは、自分の子供たちを本能的に愛し、陰鬱な夫に義務から仕える貞節な女性の歴史です。可愛い若い女性が恋愛感情を抱き始めて、不意に彼から口づけされます。羞恥心が反乱を起こしたように襲って来ます。そして次に和解の心です。彼女は、天使のような純潔な感情を取り戻します。そして事態は進んでいきますが、大変に無垢な最初の口づけの他には、何も親密なことは起こりません。少なくとも彼女は嫉妬で死にそうです（というのも彼女の恋人は、本当の悪魔であるアングレーズに溺れているからです）。そして、彼女は死にかかっている時、無垢の口づけが生き生きと彼女を燃え上がらせて来たことを告白します。この書物は多くの意味に溢れています。取分け理解しなければならないことは、最も高貴な感情がそれでもやはり肉体によるものであること、穴を塞ぐ刺繍は一枚の布地を前提としていることです。そのことしか私には言えません。ダイヤモンドは沢山の面を持っています。

しかし、あなたは困難なことを理解します。多くは単純化されて言います。あるいは、彼女は身を捧げるまでに彼を大変に愛しました。あるいは、嫉妬から死ぬまではそれ程愛しませんでした。その点について議論したかったので、歴史家は自分なりにその問題を十分明らかにしたいと思いました。

彼は言いました、「作品を読むのが全てではありません。如何なる状況の中でそれらの作品が書かれ、如何なる事件がそれらに影響を与えたかを知らなければなりません。この小説は実際にバルザックに起きた冒険の物語です。少なくとも現実において、その女性は身を任したのであり、そこにこの小説を解明するものがあります」。

間接的に言うと、感情の問題は歴史の問題になります。恐らく、嘘つき女が言う沢山の枝葉末節の話を読んだり受け入れることがなかったなら、最早小説を理解したり愛することは出来ません。私の考えでは、この様にして人は愚かになって行くのです。偉大な作品の火や、自らの火が消されています。最早、プラトンを理解しようとしません。「彼は時流に適っている。当時考えられていたように彼も考えている」と言われます。ソルボンヌ大学の歴史家は、デカルトの二つの思想を一緒に認めるために書いている学生に言っていました。「何故あなたはそれらの思想を一致させたいのですか。あなたはデカルトの思想であることを十分に承知していますし、テキストが変わる訳ではありません。それ以上の何を望むのですか」。

(一九〇八年八月二五日)

百四十六 或る祈りへの神の答え (RÉPONSE DE DIEU A UNE PRIÈRE) (1)

散歩は吉だが、海水浴をすると良くないことが起こる、と占い師から言われた若い娘は、それまで度々海水浴をしていましたから、真に受けて言いました。「潮の満ち引きを早くして、時間を進めることを神さまにお願い出来るかしら」。私は予言者に成った気分でした。そして、私の言葉を通して神は彼女に言うのでした。

神は言いました、「我が娘よ。お前の祈りは、お香の匂いよりも甘く私は嬉しい。何故なら人

々は私のことを忘れてばかりいるからで、私が人間たちに何か拒む機会など殆どないからだ。最善ではなかったのに、人間たちに何時も知恵を少し与えたが、報いは少ない。けれども、お前は私の言うことを聞き、私を理解しようとしている。

私は、あらゆるものに開かれた眼を持たなければならない。世界は大きく、全てのものが関連し合っている。時間を進めることは、私が爪で弾くように一寸したことで出来るとあなたは思っているが、そうではない。世界は上手く接合されている。最初はぴったりと合っている。そして歯車が単に噛み合わなくなってしまうことを、私は大変に良く知っている。説教師たちは、世界を大変複雑な時計に譬えている。彼らは間違っていない。娘よ、もしもお前が決して時計に触れなかったなら、急いで回る時計の針を狂人のように見るだろう。二十時間、三十時間、四十時間と未知の時間を告げる時計の鐘の音を聞き、お前は逃げ去るだろう。しかし、私は何処へ逃げれば良いのか。

潮の満ち引きは、遠くからやって来る。それは大洋を横切ってやって来る大波で、海の底の高さに応じて遅くなり、海の底の傾斜や向きによって速くなったり、遅くなってやって来ることがある。私はそれを全て定めているから分かっているが、お前は海水浴のことしか知らない。私のことを忘れていた多くの人々は、それでも私のことを勘定に入れている。彼らは出発の時間を判断したことがあった。大きな商船は、出発すべき神の時間を待ち受けている。その時は誰も知らないから、何時も祈るだけだ。彼らは私に何も変わらないことを懇願する。もしも私が元気であることを望むのなら、私はつれなくしてはならない。お前はこの世で一人っきりではない。私には限りなく沢山の思想の波がやって来るが、それ等は私自身を思い起こさせてくれる。お前に私の場所を与えることは出来ない。お前は大変に若く、自分の望みが余り良く分かっていないのだ。

お前は沢山の仲間のことを考えに入れていない。彼らは自分の思想を探求しており、もしも私が善良な王であるならその思想を見出すだろう。海の潮は、太陽と月に従う。海は一粒の水滴が落ちていくときのように変形する。大地が回転するとき、一緒に回転する液体を二つの歪みとか瘤を作るが、私はそれをも調整した。それを少しずつ変えたなら、惑星の軌道は狂ってしまうだろう。考える者は何時も夢想に陥るが、私は非難しないようにしている。

ファエトン(2)が太陽の車に乗って行き、火だるまになる話を人々はするが、それは真実ではないのだ。私はファエトンを彼の仲間に任せたとはいえ、彼は私の息子だ。我が娘よ、お前も同じだ。私の言うことを聞くが良い。お前が占いに何も心配しなくなる程賢明に成るなら、私は王杖と力をお前にあげよう。しかし、そうなる前に、お前は日暮れ時に自分自身の身の上に何度も涙を流し、潮の波が海藻をばらばらに解いていく回数よりも沢山の涙を流すことになるだろう」。

(一九〇八年八月二六日)

(1) ガリマール社のプレイヤード叢書『プロポ集1』にてモーリス・サヴァンが付けたタイトルは「神さまの話 (UN DISCOURS DE DIEU)」である。

(2) フェアトンは太陽神ヘリオスの子で、太陽の車に乗るが、軌道を外れて危うく大地を焼き払いそうになり、ゼウ

スによって川に落とされた。

百四十七 恥辱の無益さ (INUTILITÉ DE LA HONTE)

あなたがめったに来ない通りを歩く時、もしも深靴をかちかち鳴らし、ふくらはぎを見せて通行人に言い寄っている若い娘たちの一人を注意深く観察するなら、この若い娘たちが他の娘たちと何ら変わりなく似ていて、刺繍をしたりお茶を出す娘と同じ様に、自然に客引きしているのを発見します。

その時、はっきりと分かることは、そこにいる彼女たちの人生に起きた出来事がもしも別のものであったなら、彼女たちは実際には婚約者や母親であったかもしれないということです。そのことから恥辱は不確かな脆い美德であるのが良く分かります。

物事の本質は倫理から浮き出てきますが、それは人の意見や主義主張を畏敬する気持ちです。犯人が顔を赤くして両手で顔を隠す時、私たちは多くの違法行為が行われたのを信じます。ジャン＝ジャック・ルソーは女性に、他人の意見を恐れたり尊敬するのに慣れなければならないとまで言っています。男たちの望みは大したことではなく、女には貞淑だけでは満足しないが何時までもそんな風に見える様に気を遣って欲しいというのは事実です。そこから私たちは羞恥心を高価な甲冑のように磨いて光らせます。

意見といっても、色々があるとすれば不幸です。至る所に良い評判もあれば悪い評判もあり、貴族の家も泥棒の家もあり、公的な社会の中にも家があります。至る所に鞭よりも上手に叩く侮辱があります。至る所に恥知らずや破門された人々や絶望した人々がおり、至る所に意見や主義主張の美德があります。それ故にどんなに意見の言いなりになっても、女性は最も下劣な仕事でも十分順応することが出来ますし、彼女には十分な道理があります。社会から離れて暮らしていると意見は変わりますが、恥辱にはあらゆる力が残っていて、美德には何の役にも立ちません。

移行して行く瞬間は苦しいものです。しかし、それが短い時間であるなら、殆ど苦しみを感じません。それ故に半分仮面を取って、偽善に我慢出来ない多くの女性たちは醜聞が好きであり、或る意見の王国から別の意見の王国へ不意に移らせて行きます。例えば、或る労働者が劇場へ這入って劇に夢中になっていると、もう労働者ではなくなり女優と同じであり、もしも彼女が服装に気を遣って公然と恋人を作っても、それを追撃した人々からも多くの祝辞を受けることが出来ます。もしも歌を歌ったり詩を朗読する代わりに、彼女があっさり売春婦になったならば、その時は最早その人々の相手にされないでしょうし、別の人々の相手をするのでしょう。新しいやり方があったところで観客も別の人々なのです。要するに、他人の意見を聞いて生きる者には、墮落というものも決してあり得ないのです。

(一九〇八年九月二日)

百四十八 平板な絵葉書 (PLATES CARTES POSTALES)

私は何枚もの絵葉書を受け取りました。風光明媚でもない地方で私はこの夏を過ごすのがはつきりしてしまっていたので、その時書けば良いと思い返事も出さずにしています。その後、それらの絵葉書はランプの下で、おい！とか、やあ！と言っているようです。実際にはそれらの絵葉書は大したものではなくって、誰の興味も惹かなくなっています。それは樹木や岩壁や河や滝があるだけで、各々の葉書には端正な文字や汚い文字が何行か書いてあって読むことが出来ます。しかし、もしその絵のイメージと同じ本物の風景を見なかったとしたら、そのイメージから実際の風景が分かって同じ概念を与えることが出来ると私は決して思いません。

私たちが自然を気に入ることは、一般的に大変なことです。それ故に偉大なる自然の横に立って、小さな存在である人物の写真を撮ろうとします。つまりそうすることによって、偉大なるものを理解させることが出来るようになります。しかし、そのことを実感させることが出来るのでしょうか。決して出来ません。遠くから山を見る限り、私は山が偉大であると感じるまでにはなりません。美しい急傾斜の山肌に十分近づいて顔を上げた時に感じます。その山の何でもない小さな頂上に手を触れるのを想像して、何時間歩いても到着しない時もそれを感じます。要するに、私が偉大なものを感じるのには、何時も私の活動を通してです。

実を言えば、私がそれらを把握するのは、つまりそれらを理解するのは私の活動を通してでもあります。もしも座った儘で、動かない儘で両眼を大きく見開いていたとしても、私は居眠りや愚鈍状態に陥って仕舞うでしょう。風景というものは、私の眼を取り戻してくれます。全てがごちゃごちゃになります。もしも全く反対に、私の注意力が目覚めれば、全てをしかるべき場所に置くための活動となります、それは両眼の活動であり、頭の活動であり、肉体や足の活動であり、これらのあらゆる経験が私の印象やイメージを少し変えて、対象との距離や偉大さを学びます。私の頭が前に傾いて行く間に、深い溝が掘られます。そして、地平線は私が歩む最初の一步で後退して行きます。会話は冷静になって、動作もありません。風景も動きがなく、冷たくなって行きます。決して眼だけで見ません。手や足も会話を生まなければなりません、そうしなければ平凡な絵葉書から世界を見るだけになります。私は聴覚や嗅覚を絵葉書に働かせませんが、もしも波の音を聞かず、そして少し前に嗅いだ牡蠣から思い出される美味しそうな匂いも感じないなら、自分の足を使って海で何を見るのでしょうか。絵葉書から学ぶ者は、一体如何にして実際の事物を見るのでしょうか。

(一九〇八年九月三日)

百四十九 余りに早熟な賢者たち (SAGES TROP PRÉCOCES)

老いた批評家が煙草に火を点けて言いました、「ラシーヌは私が興味を抱いている若者たちを

試す試金石に役立つ。若者たちは信用してくると私に言う、「ラシーヌは退屈で平凡です」。私は彼らに答えて言う、「もっと読みなさい。そして全ての言葉を吟味しなさい」。もし私が言ったことを聞かずにその儘でいたなら、彼らの文学上の道は長く続かないだろう。二、三年後にラシーヌは立派であると話している彼らを変えようとするが、それはラシーヌの目立たない力、穏やかにさせる特色、そして力を弱めることなく情熱を押しやる最高の調和を称えているものである。私はその時、自問する。本当だ、少年よ、君は基礎訓練をやっているのだ。道具を習い、町での夕食を覚える。少なくとも、ネクタイのことを最低でも考えなさい、その時は申し分なく上手に結ぶことだろう。草地をギャロップで長い時間走った後、何頭かの子馬たちは柵をとうとう最後に跳び越えて、次のように私に言うのだ、「ラシーヌは小学生です。押葉標本となった植物のように、情熱もぴったりとくっついていますが、そこは飼料になるウマゴヤシの草を見なければならぬ畑の中なのです」。そういう彼らも遠くへ行くのだ。人は無視することが出来るが、先ずは理解しなければならない」。

友人の老いた医者が答えて言います、「私にも試金石があるが、それは肉体とは違う魂である。魂は何でもなく人間は物を食べる肉体でしかない、と単純な人間は直ぐに言うようになる。その時、私は自問する。そこには優れた建具屋たちがいる。彼らは作法に適って骨と筋肉を仕上げ、臭素処理して情熱を加工する。私はもっと注意深い心理学者であり、内面生活と精神の力と心の奇跡を信じる者である。彼らは平凡な概論は書かずに、高度な愚見を生み、星々を見て過ごしている。私は英知のある彼らの言葉を期待している。もしも彼らが敬虔なる詩や散文の演説家に止まっているか、人間らしく生きているなら、その時は私が飛躍する時である。何故なら〈必然性〉を理解しないように両眼を閉じる人間であってはならないからだ。その様なことは、間違いを嘆き悲しんでいることよりももっと悪い知恵であるからだ。神や魂や未練の世界を追放することが、ヘラクレスの本当の仕事である。恐らく、今でもそんなにも早く行われる必要はないし、余り急ぐことはない。間違った力を感じなかった者は、真実の価値も決して知らないだろう。そして、もしも雑草が少しでも根を張って仕舞わないうちに引き抜かれたならば、誰も地面を掻き回しはしない。以上は、二十歳の時に唯物論者だった者が屢々、如何にして六十歳の時には教会管理人になるかということである」。

(一九〇八年九月五日)

百五十 恩知らずの奨学生 (LE BOURSIER INGRAT)

「感謝の気持ちは、このオリエントのリキュール酒のようなもので、黄金の壺の中にしかない」という箴言が、オージェ (1) のものか、パイルロン (2) のものか、私は知りません。しかし、それはアカデミー・フランセーズ会員の匂いがします。それを書いた者は、大急ぎで階段をよじ登り、給料以上のチップを受けた者であるのは確かであると思います。幸福な黄金の魂は、感謝の言葉を言うことを覚えます。この私は、多分、何か安っぽい金属で創られているのであって、

好意を受け入れることがありません。

しかしながら、それが何でしょうか。もしも友人が私よりも金持ちで、私を城の中へ入れてくれて、馬車で案内してくれたならば、怒ることがあるのでしょうか。決してありません。私はそんなことを考えることもありません。恩義を感じることもありません。彼は感謝されることを決して期待しません。私はそれをあるが儘に受け取ります。もしも彼が貧乏人であったとしても、私は少しも彼を愛さないでしょう。彼が私に金利を払う時は、最早彼を愛しません。彼は彼でしかありません。私も私でしかありません。それが私たちの贈り物です。もしも二人のうちの一人が与えた以上のものを受け取れると思ったならば、私たちは友人でなくなります。

私を苛立たせるものは、金持ちの人間が御者にお金を払うように友人へお金を払いたいと熱心に望んでいるのを想像することです。そうではないのです。私は、人が望む物は果物でも、旬の野菜でも、ハムでも、帽子でも、何でも良いですから正規の値段で沢山売りたいと思います。しかし、親しいからと言って値切ることは出来ません。それは間違った友情であることを私は知っています。そして真実と善行に値する友情を望めば望む程、私は益々苛立ちます。感謝の気持ちは、鉄製の器の中で醗酵し、泡立ちます。怒りの湯気が上がって行き、嫌悪が小さくなって残ります。そこにあるのは、黄金の魂ではありません。

しかし、黄金の魂は何処にあるのでしょうか。私は寧ろ、隠された怒りにあると信じたいと思います。ギリシア語が大変に得意な奨学生を知っていますが、彼の奨学金は何人かの共同慈善家のお陰でしたので、奨学金を受ける時は毎年、次の様に言われていました、「奨学生であることを忘れないで下さい」。そして毎年、こだまの様に繰り返し、物知りぶった人々が次のように言っていました、「奨学生であるあなたは……」。先日、幾分辛かった形だけの感謝の気持ちから解放されたばかりの彼は、内緒で私に言いに来ました、「私は彼らのような人々に何の義理もありません。彼らは優秀な生徒を援助することが嬉しいのです。そうです、私は優秀な生徒です。必要な限り勉強して、私はあらゆる賞を取ります。私は決して裏切っていません。彼らのためにやるべきことは全てやりました。私は彼らの讃辞を受けているのに、何故何度もそれを望んでいるのでしょうか。契約を結んだ取引では決してなかったのです」。以上は、未熟な生徒の話です。鉄の魂です。鉄の倫理です。貧しい者たちは最早、金持ちを愛していません。〈黄金の子牛〉(3)はそれを聞いて泣きました、そしてそのアカデミー・フランセーズ会員の話の中で本当の涙を流しました。

(一九〇八年九月七日)

(1) エミール・オージェ (一八二〇～一八八九) は、第二帝政下で風俗劇を創った劇作家で、ブルジョア社会の価値観を擁護した。

(2) エドアル・パイルロン (一八三四～一八九九) は、エミール・オージェ同様に伝統主義者の劇作家。

(3) 黄金の子牛の像は、ヘブライ人が崇拜した金銭とか金力を象徴している。

(次章へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ II 【2013年 7月号】

<http://p.booklog.jp/book/72472>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72472>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72472>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ